

二〇二三年 度

入 学 試 験 問 題

国 語

注 意

- ・問題は十六ページにわたって印刷してあります。
- ・試験時間は五〇分です。
- ・声を出して読むではいけません。
- ・作問のため本文にふりがなをつけた部分があります。
- ・答えは、問題の指示に従って、解答らんの決められた場所に濃く、はっきりと書きなさい。
- ・答えをなおすときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- ・字数指定のある問いはすべて、句読点・記号も一字と数えるものとします。
- ・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

法
学
人
校

東洋大学

東洋大学京北中学校

1

次の問いに答えなさい。

問一 ぼう線部に相当するカタカナを、漢字に直しなさい。

- (1) この物語は代々コウシヨウされてきた。
- (2) 一日センシユウの思いで待ち続ける。
- (3) 論文のヒヒヨウをする。
- (4) 様々な役を演じられる役者はチヨウホウされる。
- (5) 蔵に米ダワラを運び入れる。

問二 (1)～(3)の作品の筆者(作者)として適切なものを、ア～コからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|--------|
| (1) 蜘蛛 <small>くも</small> の糸 | (2) おく <small>の</small> ほそ道 | (3) 雪国 |
| ア 川端康成 | イ 太宰治 | ウ 森鷗外 |
| カ 芥川龍之介 | キ 夏目漱石 | ク 小林一茶 |
| | | ケ 坂口安吾 |
| | | コ 紫式部 |
| | | 工 松尾芭蕉 |
| | | オ 清少納言 |

問三 (1)～(4)のことばの対義語を、ア～タの漢字から二つ組み合わせて作り、記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| (1) 生産 | (2) 損害 | (3) 結果 | (4) 共同 |
| ア 可 | イ 益 | ウ 原 | 工 動 |
| カ 費 | キ 単 | ク 許 | ケ 受 |
| サ 難 | シ 消 | ス 因 | セ 独 |
| タ 利 | | | ソ 服 |
| | | | コ 従 |
| | | | オ 困 |

問四 次の文章は本校の生徒が書いた文章です。以下の問いに答えなさい。

先日帰宅する途中とちゅうに、ある求人せうじんの張り出しが目に入った。祭りのおみこしの担ぎ手の募集しゅうじだった。祭りとは、その地域の人たちが引き継いでいくものであるから、募集にかなり驚おどろいた。

伝統文化を引き継ぐ人材が少なくなってきたのは前々から知っていた。 X、祭りで募集が出されるとまでは思っていなかった。 Y、今後、地域の祭りがなくなってしまうのではないかと心配になった。

祭りは、友達や地元じもとに帰ってきた先輩・後輩せんぱい・こうぱいに会える機会であり、また、新しい交友関係を築ける大切な行事だと私は思う。だからこそ、自分の地域の祭りがなくならないよう、大人になっても積極的に祭りに参加していきたい。

(1) 空らん X ・ Y にあてはまることばとして適切なものを、ア〜カからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ しかし ウ たとえば エ 同時に
オ 確かに カ もしくは

(2) ぼう線部「行事だ」の主語として適切なものを、ア〜オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大切な イ 交友関係を ウ 私は エ 地元じもとに オ 祭りは

2

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

護まもるが帰ってきたというニュースを持ってきたのは、クリーニング屋のおじさんだった。私は仕事から戻もどってきたばかりで、土臭つちくさくよごれた手を石けんで洗おうとしていたのだけれど、ピンポンが鳴って、台所に立っているおばあちゃんの代わりに玄関げんかんに出ていったところで告げられたのだ。ああ十和子ちゃん。もう仕事終わった時間なんだね。護くんには会いにいった？——と。

「護？」

①私は間拔まぬけな顔でその名前を口にしたと思う。こうして町じゅうの家をまわって、洗濯物せんたくを回収し手渡てわたしているクリーニング屋さんが、隣に住む護のことを知っていて、私と同年だと認識にんしきしていることはまったく不自然ではなかったけれど、でもその名前を耳にするのがあまりに久しぶりすぎて、私は思わず聞き返してしまった。

「護って、桜田護？」

おじさんは、私の反応に驚おどろいたようだったけれど、「若い人は時間が過ぎるのが速いのかな」と笑った。

「小学校の頃は、いつも一緒に帰ってたじゃない」

とまで言われたので、慌あわてて「いやいや、憶おぼえてますよ！」と弁解して洗濯物を受け取る。でないと、次の家には「桜田さんちの護くんが帰ってきたのに、桐島さんちの十和子ちゃんときたら名前も憶えてなかった」という話になって伝わってしまう。お金を払い、おつりをもらいながら少し話をした。

「護が、ええと、東京から帰ってきたってことですか？」

「うん、さつき桜田さんちに行ったら、ちょうど着いたところらしくてね、玄関で鉢合はちあわせしたんだ。しばらくはこっちに居るって言ってたよ」

ちなみに外は雨で、ガラス戸の外に見える土はくろぐると湿しめっていた。最近では雨が多い。五月の連休が終わった頃から、この町はなぜか雨が多くなる。そうして止んだりまた降ったりしながら、梅雨まで通して降り続ける。

私が耳にした護の最後の消息は、東京で学生をしているというものだった。高校を出てすぐ、農協に勤めるようになった私には、いったい自分が何年働いて、同じ年で大学に行った人たちが順調に進んでいると今何年生であるのか、計算しないとわからないけれど、護は一度入ったとてもいい大学を途中でやめて、専門学校に入り直したり、ひときわの遠回りをしているとは聞いた。そのあとにも噂うわさを聞かないから、きっと、田舎いなかに帰ってくるかどうかはまだ問題にならない身分なのだろうと、ぼんやり認識していた気はする。

その護が、長期休みでもない時期に実家に帰ってくるのが、なにを意味しているのか——クリーニング屋のおじさんは、どことなく話したそうでもあったけれど、今は繁忙期はんぼうで忙しいのだろう、領収書を切るとすぐ、玄関のガラス戸に手をかけた。

「会いにいったら？ もうずっと会ってないんでしょ」

と、出ていく時に言われた。私は笑顔をつくって「はいっ」といい返事をしていた。それはとりあえず、脊髄反射というか社交辞令というかそういうものに過ぎなかったのだけれど、水を跳ねさせてクリーニング屋さんが駆けていった、庭の飛び石を眺めている間に、私はゆっくりと護のことを思い出そうとし始めていた。

雨音がする。玄関からはみ出した家の灯りが、濡れた地面を光らせている。いつのまにか、領収書を受け取った指に力が入っていたらしく、かさりと紙の音がした。

護は私の幼なじみだ。

私たちはきつと、大人が見れば目尻を下げてしまうほどの、絵に描いたような幼なじみ同士だったに違いない。クリーニング屋さんが言った通り、私と護は、記憶にある限り幼い頃から、多分小学校いっぱいくらいまでは、帰り道を一緒に歩いてきた。四方八方にどかんと山が立ちふさがるこの町で、ひとときわ奥まった集落に住んでいる私たちは、必然的にふたりきりで歩く時間が長かった。晴れの日はあぜ道に入って道草をくい、雨の日は傘をぶつからせて身を寄せおしゃべりをした。

③ 護はとても「いい」男の子だった。いい男の子、という言い方は普通あまりしないのかも知れないけれど、私と数人の友だちは、「悪い」男の子の対義語としてその言葉を使うことがあった。悪い男の子とはもちろん、道ばたに落ちている蛾の死骸を持って追いかけてきたり、パークのフードに生きたカエルを入れたりしてくるクソガキのことで（死んでるカエルのほうが多分もっとやだけど）、いい男の子というのはその逆、大人しく無害な子のことだった。

うちの小学校は小さくて、しかも私の学年は男子十人女子五人というちょっとアンバランスな構成だったため、女の子五人で、たまにこっそりと、男子を「いい」と「悪い」に分ける遊びをした。外体育で幅跳びをする前の休み時間なんか、手持ちぶさたな時、地面に棒で線を引き、右と左に男子の名前を書き入れていく。右はいい男子、左は悪い男子。「西口、西口。あいつまじ最悪」「こないだユカちゃんのキンキ下敷きにラクガキしたよね」とか、まず名前が出るのは悪い男子のほうで、それが上から三つ四つ一気に並んだ後で、「でも中田くんは、いい」「あいつ、いいやつ」と「いい男子」の名前が始め、それから残りの男子を便宜的にどちらかに分ける作業になる（微妙なラインで「どっちか」を決めるのも意外と盛り上がる）。護は、その最後の最後で、みんなが無言のままに、「いい男子」の末尾に入れられるような子だった。関心を持たれていないわけではない。あきらかに「いい」ほうすぎて、わざわざ議論するまでもないし、あんまり話すと、彼に向けた好意の一片がばれてしまう——そんな感じだったと思う。あの頃の私たちは、みんなどこかしら、護の一部を好きだったんじゃないだろうか。見た目が、子どもの中でも清くかわいらしかった。高学年になると、その中に、強く育っていくであろう身体の線が見え隠れしてわずかに異性のおい

がした。頭がいいのに、朗読なんかで先生にあてられると、はにかんで小さい声しか出せなかった。——客観的に見ても、小学校でモテるタイプだったはずだけれど、五人しかいない女の子の中で、護のそういう「いい」部分を最も多く知っているのが私であることは誰の目にも明らかで、多分それゆえ、護を好きだと言出す子はいなかったのだ。

十和ちゃんと護くん。子どもの頃は、スプーンとフォークみたいなのに、セツトでそう呼ばれた。先生も友だちも近所の人たちも、みんなそういうふうと呼んだ。

「護くん」とセツトになっている私はラッキーなのだ。そう気付いたのは八つか九つの頃で、西口みたいな悪い男子が幼なじみじゃなくてほんとによかったあ、と無邪気ににまにまにしていたのだけれど、もう少しだけ大きくなると、幸運を享受するにも、小さな不安のよくなものが生まれてきた。

——こんなに「いい」男の子と、私が、一緒にいていいのかな？

それはカタツムリの目ほどもない、本当に米粒以下の不安だったし、口にしたら卑屈な言葉にしかないとわかっていたから、護にも他の子にも告げたりはしなかったけれど、確かに私の内部にはあった。

だからきつと、中学へ進んだ機会に、私は護と「セツト」の場所から離れてしまったのだ。護となら、学校で口をきくのは照れくさくても、帰り道や、家に帰った後で、仲良くする時間を持つことはできた気がする（小学校を出る直前まで、私は夕食後の護んちにありがこんで、宿題を手伝ってもらうことがあった）。でも私は、ふもとの中学と共同で練習する吹奏楽部を選び、放課後の時間を全部つぶした。授業が終わるとマイクロスバスでその中学へ行き、帰りはそのまま、バスで戻ってきて家の前で降りしてもらう。きつい練習と、見慣れぬ顔に囲まれる緊張で、私は帰るとヘトヘトだった。勉強もろくにせず、めし・風呂・寝るというオヤジの三点セツト生活を素でなぞってしまう。

それを二年も繰り返したら、私はいつのまにか、「十和ちゃんと護くん」の片割れではなくなっていた。中学三年の春、護は同じクラスの女子と付き合い出した。それはとても「いい」子らしい、交換日記をしたり日曜日に隣のショッピングモールで会ったりといった、清い交際だったらしいのだけれど、私はひそやかな失望を感じた。護に対する失望じゃない。やっぱり私は、「いい」男の子と一緒にいるべきじゃなかったんだという、自分の立ち位置への失望だった。

——幼なじみってこんなものなんだ。

雫のついたビニール傘の向こうに、護と彼女の後ろ姿を見ていた。珍しく部活がない日の学校帰りで、校門を出ようとしたところで、ふたりの背中を見つけてしまい、動くに動けなくなってしまった。

そのまま別の高校に進み、私は護と口をきいていない。

それでも、雨の中をすぐ護に会いにいったのは、単に好奇心からだったと思う。

なにしろ時間が経って、私は、恋人たちの後ろ姿に傷ついた十四歳じゃなかった。もう二十三で、この町から出ないままでも色んな人と会って、人並みには恋をしている。だから自分が護の「幼なじみ」に過ぎなかったことを気にしているわけじゃない。

「護が帰ってきたらしいんだよ、顔見にいきたいから、なんか桜田さんちに届けるものちょうだい」

とおばあちゃんに言い、畑でとれた野菜を持って護の家に向かった。「隣」とはいえ、家もまばらな集落だから、畑をはさんで五十メートルほど離れている。半端な近さで面倒だったけれど、一応傘をさした。

護の家は、農家だった名残をとどめて、とても古く広い。玄関で「こんにちはあ」と呼びかけても、一回では届かないことが多く、こんにち、はあ！と声を張り上げてやっと、おばさんの返事がかえってくる。

「はあい」

スリッパをばたばたと鳴らして廊下を駆けてきたおばさんは、私の顔を見ると、「あら、十和ちゃん」と顔をほころばせた。そうしていきなり、奥へ向かって声を張り上げた。

「護！ 十和ちゃんよ！」

ぎょっとした。そういえば昔は、私が玄関に立つと、すぐにおばさんが護を呼んでくれたけれど、そんなの何年もないことだった。私が桜田家に回覧板やおすそわけを持つてくることはたびたびあったけれど、そこに護がいたことはなかったのだ。今、いきなりこうして昔の「お約束」を持ち出されると、どきまぎしてしまう。

「あ、あの、護、帰ってるんですか？」

一応知らなかったふりを試みたものの、おばさんは、「クリーニング屋さん聞いたんですよ、さつき急に戻ってきたのよ」とこともなげに言った。

ふたりで家の奥に目をやる。返事はない。灯りの少ない廊下が、奥に向かって消えていくようにしんとびびっているだけだ。

——今更、「十和ちゃんよ」って言われても、別に会いたくないんじゃないのかな。

そう思ったところで、廊下の奥のふすまから、ひよいと頭が出た。ああ、護って大きい声が出せないから、いつもおばさんに呼ばれても返事をしないんだって、と急に思い出した。頭の出る高さが違ったけれど、周りの薄闇から浮いた白い顔の色が、そのままだった。

護はひたひたと廊下を歩いてきた。こちらへ近づいてくる姿が、小さい頃のまんまに見えたり、居間の灯りが漏れたところでは急にのっと大きくなったりして見えた。そうして私の前に立った護は、やっぱり昔とたいぶ身体の大きさが変わっていたけれど、護そのものだった。

「十和ちゃん」

すぐそばまで歩いてきてやっと、ひっそりと笑うのも、護の癖だった。

なにもかもが懐かしくて——忘れていたフィルムが頭の底から次々と引き出され、「今」に重なっていくのが面白くて——私は思わず顔を崩して笑っていた。

「護」

右の頬ほほの下の、輪郭りんかくから外れそうなところにぽつんとほくろがある。のも、今、思い出した。

「護う」

ともう一度呼んでしまった。大人の顔の護が笑った。

(豊島としまミホ『夏が僕を抱く』所収「ストロベリー・ホープ」祥伝社)

問一 ぼう線部①「間抜けな顔」とありますが、「私」(十和子)が「間抜けな顔」になったのはなぜですか。理由として適切なものを、ア〜オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア クリーニング屋さんが「護」と「私」が同年であることを知っていたから。

イ 仕事から帰ってきたばかりのところに突然とつぜんクリーニング屋さんが来たから。

ウ 東京の大学へ進学したという「護」の名前を聞くのがあまりに久しぶりだったから。

エ 別の高校に進んだきり口をきいていない「護」のことを思い出せなかったから。

オ 幼い頃から仲の良かった「護」に何かあったのかと不安になってしまったから。

問二 ぼう線部②「私と護は、記憶にある限り幼い頃から、多分小学校いっぱいくらいまでは、帰り道を一緒に歩いてきた」とありますが、「私」と「護」の関係をたとえた表現を、ここより後の本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

問三 ぼう線部③「護はとても『いい』男の子だった」とありますが、『いい』男の子」の説明として適切なものを、ア〜オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人がいやがるようなことをいつさいせず、誰にでも親切でリーダーシップのある男の子。

イ 特に自己主張をすることなくひかえめだが、女子から決してきらわれることのない男の子。

ウ ほめられるところも、叱しかられるところもない、周囲に埋うもれてしまうような印象の薄い男の子。

エ 異性から好意を寄せられるような、優やさしさと行動力を備え、人間的な魅力みりょくにあふれた男の子。

オ 一言で言い表すことはできないが、かもし出す雰囲気ふんいきが他人を引き付ける、味のある男の子。

問四 ぼう線部④「私はひそやかな失望を感じた」とありますが、このときの「私」の気持ちとして適切なものを、ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア みんなから人気のある「いい」男の子であった「護」が、結局同じような「いい」女の子とつきあっていることにつまらなさを感じている。

イ 「私」が「護」のことを最も多く知っているはずだったのに、「私」の知らないところで女子と付き合いだしたことにひょうしぬけしている。

ウ 「私」自身も以前から不安に感じていたが、「護」のような「いい」男の子には、やはり自分はずり合わなかったと再確認してがっかりしている。

エ ずっと「護」のことを異性として意識してきたのに、なぜもっと早く思いを伝えなかったのかと自分の意気地なさに落ち込んでいる。

オ 「護」は女子に興味がないと思いついていたので、他の生徒たちと同じように男女交際をしていることに驚きをかくせずにいる。

問五 ぼう線部⑤「護の家に向かった」とありますが、「私」が「護の家に向かった」理由として適切なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幼なじみだった「私」に何も言わずに彼女を作ったことを引きずってはいしたが、久しぶりに帰ってきた「護」に会ってみたいという気持ちもあったから。

イ 自分が「護」の幼なじみに過ぎなかったことをずっと気にしており、大人になった今ならその時の気持ちを「護」に打ち明けられると思ったから。

ウ 「護」が彼女を作ったことに傷ついたこともあったが、それから時間も経っており、大人になった「護」の顔を見たいという気持ちになったから。

エ 中学生の時は「護」に失恋したような気持ちになっていたが、人並みに恋愛を経験した今なら「護」よりも優位に立てると思ったから。

オ 「護」と疎遠そえんになってしまったことを後悔こうかいしており、これからまた以前のような「幼なじみ」に戻りたいと思ったから。

問六 ぼう線部⑥「こちらへ近づいてくる姿が、小さい頃のまんまに見えたり、居間の灯りが漏れたところでは急にのっと大きくなったたりして見えた」とありますが、「私」に「護」の姿がこのように見えた理由として適切なものを、ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何年かぶりに「護」に会えた喜びで舞^まい上がってしまい、しっかりと「護」の姿を目でとらえることができていないから。

イ 久しぶりに会った大人の「護」には昔と変わらない部分があり、「私」の中の以前の「護」の記憶がだんだんと呼び起こされてきているから。

ウ 「護」の家は大きく広いために光が行き届かず、薄暗い中で大きく変わってしまった「護」の姿がよく見えないから。

エ 「護」に会うのは中学を卒業してからはじめてだったが、あの時のまま変わらないでいてほしいという思いが「私」の中にあつたから。

オ ずっと口を聞いていなかった「護」の姿を見たことで動揺^{どうよう}してしまい、何て声をかけたらいいか考えることで頭がいっぱいだから。

問七 この文章に関する説明として適切でないものを、ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ひときわの遠回り」や「長期休みでもない時期に実家に帰ってくる」ことが、なにを意味しているのか」という部分は護の東京での生活がうまくいっていないことを示している。

イ 「大人が見れば目尻を下げてしまうほどの」という部分は「幼なじみ」を修飾しており、「私」と「護」の関係が客観的に見てもほほえましいものであったことを表現している。

ウ 「(小学校を出る直前まで、私は夕食後の護んちにあがりこんで、宿題を手伝ってもらった)があった」という部分は「私」と「護」の関係が親密なものであったことを強調している。

エ 「大きい声が出せない」や「ひっそりと笑う」という部分は、おとなしくひかえめな性格である「護」を、「私」が心の中ではさげすみ、あざわらっていることを暗示している。

オ 「護う」という呼び方は「私」の中によみがえってくる幼い頃の「護」が、大人になった「護」の姿に重なり、懐かしさで胸がいっぱいになっている様子を表している。

3

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

人間はだいたい150万年をかけて①集団規模を15人から150人に増やした。それは言葉が登場する以前にできた社会である。ではいったいどういうコミュニケーションで集団をまとめていたのだろうか。

それを示唆してくれるのがゴリラである。ゴリラは常に小さな集団でまとまっていて、何か危険を感じるとみんなが同調し、まるで一つの生き物のように動く。これと似ているのが人間のスポーツの集団である。ラグビーは15人、サッカーは11人で、互いに仲間の動きに合わせて生き物のように動くチームを編成する。練習する際には言葉で説明するが、いざ試合になれば、言葉を交わす余裕などなく、目配せやしぐさ、声だけで意図を伝える。

脳が増加し始めたころの30～50人という集団規模でも、言葉は重要な働きをしていない。これは学校のクラスに相当する。毎日顔を合わせているから、誰かがいなくなったらすぐわかる。全員がかるうじて分裂せずにまとまって行動できるので、先生や学級委員が先導できるといふわけだ。面白いことに宗教の布教集団、軍隊の小隊の規模もこれに匹敵する。会社でも毎日顔を合わせる課や部の規模がこの数だ。

では、現代人の脳の大きさに見合った150人という集団規模はどうか。これは、年賀状を書くときに名前のリストによらずに、顔が浮かぶ人の数だと私は考えている。言い換えれば、過去に喜怒哀楽をともしたり、一緒に何かの活動をしたりして、顔を覚えている人の数である。つまり、共感を抱くような活動を通じて知り合った人びとということだ、ここまですべてが社会関係資本として機能する間柄だと思われる。社会関係資本 (Social Capital) とは、人びとが暮らしを営む上で助けとなる人びとのことを指し、何か困ったときに相談したり、頼みごとができる人の資本である。言葉ではなく、身体を通してつながった間柄であることが重要だ。

これらの規模の異なる集団を日常の暮らしに当てはめてみると、10～15人は家族、その家族が集まる最大150人規模の共同体が浮かび上がる。②これらは言葉というより、音楽的なコミュニケーションでつながっている。地域に特有なお祭り、お囃子、歌や踊り、方言による調子、そして食事や服装、礼儀や作法で身体を共鳴させることによって暮らしを整えている。言葉の論理によって頭でつながるといふより、身体のリズムを合わせることで、調和しているのが、地域共同体なのではないだろうか。

③この音楽的なコミュニケーションは、人間の赤ちゃんが生まれてすぐに出会うものでもある。おとなしいゴリラの赤ちゃんと違って、人間の赤ちゃんは生まれた直後から大きな声で泣く。これは自己主張である。ゴリラの母親は生後1年間、赤ちゃんを腕の中で育てる。不安になったり気持ちが悪くなったら、ゴリラの赤ちゃんは体を動かすか、低い声を立てるだけだ。すぐに母親は気づいてくれる。一方、人間の赤ちゃんは重いし、自力でつかまれないため、お母さんは赤ちゃんを手から放して置くか、人の手に委ねる。母親から離れるか

ら、赤ちゃんは泣くのである。その赤ちゃんを泣きやまそうとして、周囲がこぞつてやさしい声を投げかける。その声をIDS (Infant Directed Speech = 対幼児音声) と呼び、ピッチが高く、変化の幅はばが広く、母音が長めに発音されて、繰り返しが多いという世界共通の特徴ちゆうてうがある。絶対音感の能力を持って生まれてくる赤ちゃんは、言葉で話しかけられてもその意味を理解することはなく、声のピッチやトーンを聞いて安心するのだ。そして、その声は習う必要はなく、誰でも出すことができる生まれつきの能力である。実際、この声の出し方を親から教わったことはないし、学校で習ったこともないはずだ。

この赤ちゃんに対して発せられる声こゝろが、音楽としておとなの間に普及ふきゆうすることになったという説がある。この音楽的な声によって、赤ちゃんとお母さんの間のように、互いの境界を越こえて一つになり、喜怒哀楽をもにしような感情世界をつくり上げたのではないかと言われている。つまり、言葉が登場する前に、人間は共同育児を通じて音楽的なコミュニケーションを発達させ、共感能力を高めたことが示唆されるのである。

改めて人類の進化史を振り返ってみると、人類は類人猿るいじんえんが持つ特徴を受け継つぎながら熱帯雨林を出て、直立二足歩行による食物の運搬うんぱんと分配を通して **X** 力と社会力を高め、多産と脳の増大にもなつて頭でつかちの成長の遅い子どもをたくさん持つようになった。その結果、母親や父親だけでは十分に子どもを育てることができず、家族が複数集まって協力し合う共同体が生まれたのだと思う。この二重構造を持つ社会が強靱きやうじんだったために、人類の祖先は熱帯雨林をはるか離れたヨーロッパやアジアに進出し、サルさえ生存できない砂漠さばくや極地にまで足を延ばすことになったのである。

教育は家族と共同体という二重構造の社会に生まれた共感力の賜物たまものである。人間の子どもが危険な時期は二つある。長い離乳期りじゅうきと不安定な思春期である。これらの時期を子どもたちは自力で乗り切ることにはできない。とくに思春期は親だけではなく、同性・異性の経験を積んだ年長の仲間が必要となる。長い離乳期は小学校へ上がる前の時期、思春期は中学校と高校に対応する。そして、それらの時期を終え、自分を社会の中に正しく位置づけるための時期が大学にあたる。それぞれの時期で学びの内容は異なるはずである。

離乳期は子どもたちが世界に受け入れてもらっていることを自覚する時期である。思春期は自分の性を自認して仲間の中で自分の能力に目覚める時期。大学は自分の能力を社会の中で相対化して人生の目標を定める時期である。こうしたそれぞれの時期で異なる学びの内容に応じて、教育は適切に配慮はいりよされ、デザインされなければならない。

これまで述べてきたような観点から眺めてみると、現代の教育は多様な問題をはらんでいる。人間の教育は幼児期から始まっており、とくに人間の子どもの成長にとって危険な二つの時期、すなわち「離乳期」と「思春期」の教育が最も重要である。

④ 人間は、知りたい、教えたい、という強い欲求を持っている。私は人間に近縁なニホンザルやゴリラの野外研究を長年実施してきたが、彼らはこれほど強い欲求を持たない。しかも人間では、知りたいという欲求が何者かになりたいという希求に結びついている。ゴリラの

子どもたちは他のゴリラのようになりたいとは思わない。人間の子どもはイチローのように、ステイブ・ジヨブズのように、山中伸弥やまなかしんやのようになりたいと思う。そして、そうなるためにどうしたらいいか、道を模索もさくするのだ。もちろん、子どもたちは誰かに憧れるあこがだけでなく、何か素晴すばらしいこと、賞賛しょうさんされるようなことをしたいと思う。ゴリラと違うのは、将来自分がどのような人間になって何をしているかを頭に描かき、そのための目標を立てることだ。その姿を見て、人びとはその子どもに必要なことを教えてあげたいと強く思う。それは親や、子どもに血のつながりのある人に限らない。赤の他人であっても、子どもたちが目標へ向かって進むことを手助けし、自分が犠牲ぎせいを払はらっても必要な知識や技術を教えようとするのである。

この両者の欲求が合致がっちするからこそ教育は成立する。なぜ両者がこれほど強い欲求を持つかという点、人間には高い「共感能力」と「同化意識」が発達しているからだと思う。私はこれを、「相手の中に自分を見る能力」と表現している。誰かのやっついていることを模倣もぼうしようとするれば、相手に同調する必要がある。人間はとてこれがうまい。サルはサル真似まねが不得手だが、人間はサル真似の名手なのだ。そして人間は相手の身になって感じ、考える。いつか相手のようになっていて自分を想像し、希望を抱いだいたり悩なやんだりする。その上で、自分が他者とは違うことを再認識にんしきし、自分独自の道を探し歩もうとする。そのときに頼たよりにするのが、そういった経験をすでに持っている人や、自分の知らない世界を知っている人だ。人間は道を探していたり、道に迷っていたりする人を見ると放っておけない。それも「相手の中に自分を見る能力」の一つだ。学ぼうとしている人の中にかつての自分や将来の自分を見つければ、足りない知識を補おうとする。

人間の社会はこの高い共感力によって作られてきたと言っても過言ではない。地域共同体は人間の互酬ごしゅうせい性と向社会性によって支えられている。「互酬性」とは、何かをしてもらったことに対して応分のお返しをすること、「向社会性」とは、自分よりも相手を優先させて奉仕ほうししようとすることである。どちらも、ともに生きている仲間に対して共感を抱かなければ成り立たない。また、人間の共同体は閉じた組織ではなく、人びとは他のさまざまな共同体や組織と行き来して暮らしている。そのときに必要なのは、自分がどの共同体や組織に属しているかというアイデンティティと、自分が活動する世界や社会についての知識である。人びとの移動が活発になり、組織の規模が拡大し、組織同士の関係が複雑になると、必要な知識は増大する。だから近年になるに従い、子どもたちが学ばなければならないことは飛躍ひやくてき的に増えて、ますます教育の必要性は強まっていると考えられる。

（山極寿一『京大というジャングルでゴリラ学者が考えたこと』朝日新聞出版）

問一 ぼう線部①「集団規模」とありますが、その説明として適切なものを、ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 脳が小さいと小さい規模の集団を作り、脳が大きくなると集団の規模も大きくなることから人間の集団規模は脳の大きさに関係していると推測される。
- イ 15人程度の規模の集団は、試合中のラグビーチームのように言葉を交わさなくてもまとまるが、150人程度の集団になると言葉が交わす必要性が生じてくる。
- ウ 150人程度の集団は社会関係資本として機能するが、15人や30人程度の規模の集団は、暮らしを営む上でお互いが助けにならないため社会関係資本とは言えない。
- エ 150人程度が、本来人間が作る集団の規模の限界であり、それ以上の規模になると争いが生じたり様々な問題が起きたりしてしまう。
- オ 言葉が生まれる前から音楽的なコミュニケーションは存在していて、言葉よりも集団をまとめる力が強いと言える。

問二 ぼう線部②「共同体」とありますが、なぜ人間は共同体を作るようになったのか、五〇字以内で説明しなさい。

問三 ぼう線部③「音楽的なコミュニケーション」に当てはまるものを、ア～オから全て選び、記号で答えなさい。

- ア 泣いている赤ちゃんに声をかけること
- イ ゴリラの赤ちゃんが体を動かすこと
- ウ 盆踊りを一緒に踊ること
- エ 言葉のやりとりをすること
- オ 人の歌声にアドバイスをすること

問四 X に入ることばを漢字二字で文中からぬき出して答えなさい。

問五 ぼう線部④「人間は、知りたい、教えたい、という強い欲求を持っている」とありますが、その説明として適切なものを、ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は危険な離乳期や思春期を一人で乗り越えることができないため、周りの年長者から教えを受けようと思い、「知りたい」という欲求が生まれる。また、誰かにとって特別な存在になりたいという思いから、「教えたい」という欲求が生まれる。

イ 人間社会で生きるためには世界に受け入れてもらうことが必要で、世界に受け入れてもらうために知識や能力を得たいと思うようになる。また、社会を維持いするためには能力のある人間が必要だから「教えたい」という欲求が年長者に生まれる。

ウ 人間は、仲間から認めってもらったり賞賛してもらったりするために知識や能力を得ようとする。また、知識や能力を仲間に教えこむことによって、何か素晴らしいことをした気分になるため、「教えたい」という欲求が生まれる。

エ 人間には「共感能力」や「同化意識」があるため、他人に同調し、誰かと同じような人間になりたい、誰かを自分と同じような人間にしたいと考え、「知りたい」「教えたい」という欲求が生まれる。

オ 人間は自分が将来どうなりたいたいのかを想像することで、それを実現するために必要な知識や技術を「知りたい」と強く思うようになる。また、努力する他者を自分と重ね合わせることで、「教えたい」という欲求が生まれる。

問六 ぼう線部⑤「ますます教育の必要性は強まっている」とありますが、教育について本文に述べられていることとして適切なものを、ア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 離乳期・思春期・それより後の時期、と時期によって学びの内容や学び方を変え、それにふさわしい教え方を考える必要がある。

イ 長い離乳期には世界に受け入れてもらうための知識を持たせ、大学生の時期には自分の力を社会の中で生かすための策を練らせる必要がある。

ウ 自分の知識や能力を自分の中だけで育てるのではなく、仲間との関係の中で自分を見つめ、自分には何が欠けているかを子どもに気づかせる必要がある。

エ 教育は他者に共感することで成り立っているので、教育の発展のためには、今後ますます人間の共感能力を高めていく必要がある。

オ 違う文化や考え方を持っている人たちとの交流のために、自分が所属する共同体の言葉だけでなく、所属していない共同体の言葉も話せるようにする必要がある。

問七 筆者の主張として適切なものを、ア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 30～50人という集団は分裂せず^{ぶんれつ}にまとまって行動できる規模であるため、学校のクラス
の人数は、それ以上でもそれ以下でも教育効果が落ちてしまう。

イ 人間が一つの共同体ではなく様々な共同体を行き来することができるのは、「互酬性」
と「向社会性」をもっているからである。

ウ ゴリラやサルは、人間のような家族と共同体からなる強靱な社会を持たないため、生
息地を世界各地に広げていくことが難しい。

エ 人間の社会を構成するために必要な共感力は、音楽的なコミュニケーションによつて
養われ、他人のために行動する原動力となっている。

オ 人間は、教育があるからこそ複数の家族を集めた共同体を作ることができ、サルやゴ
リラは教育がないために共同体を作ることができない。

カ サルやゴリラは言葉によるコミュニケーションができないため、小さな集団でしか生
活することができない。

受験番号	検号
氏名	

4																3						2						1			
問七																問六						問五						問四			
問三																問二						問一						問一			
ウ																ア						イ						ウ			
イ																エ						オ						カ			
工																ク						ケ						コ			
各4点																各4点						各4点						各2点			
20点																6点						4点						2点			
150																130															
4																3						2						1			
合 計																															
2点x5																															

4

3

2

1

合 計

2点x5